

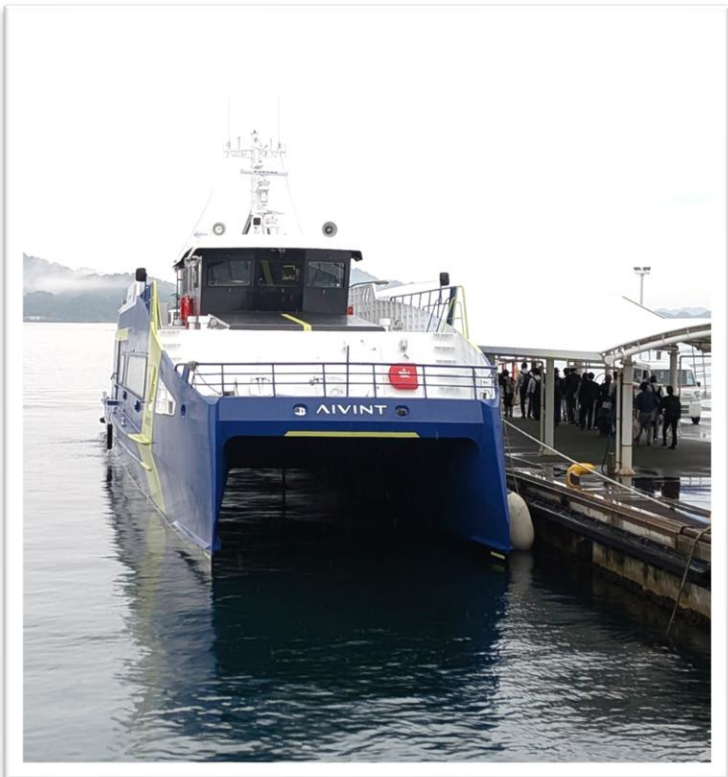


毎日暑いですね、としか言えない日々が続いていますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。8月の祝日は山の日ですが、カスタネット通信は先月号に引き続き、海の話です。1つめは6月末に開催された日本言語聴覚学会で訪れた広島について、2つめはドラえもん

広島学会

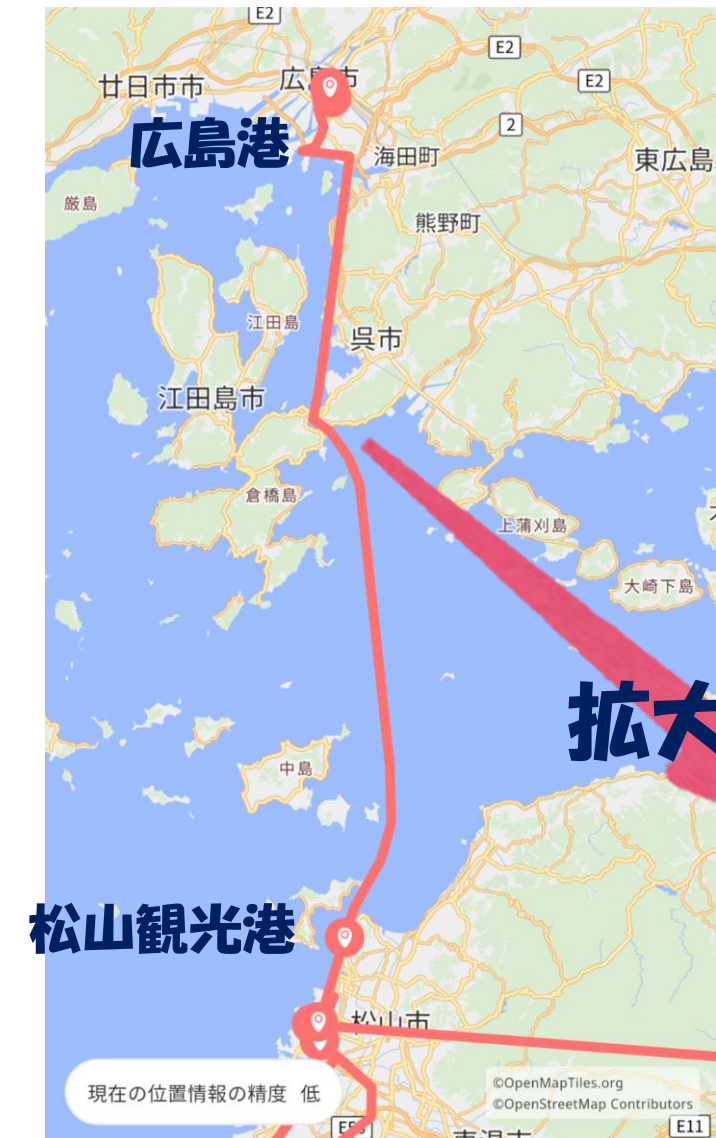
日本言語聴覚学会が開催された6月26日(金)～27(土)の週末は、7号&8号のダブル台風が列島を縦断するように通過しており、相模原に帰れるのだろうか？という不安を抱きながらの学会参加でした。

さて、オギジビは木曜日が休診日なので、学会前日は前職でお世話になった先生のご自宅がある愛媛県に行きました。夕方、松山から広島に船で行く予定でしたが、台風で海が荒れるのではないかと考え、今治からしまなみ海道を高速バスで行く代案も立てました。しかし、しまなみ海道が通行止めになり、当初の予定どおり松山観光港から広島港まで、新造高速船「リニアジェット アイヴィント」で移動しました。この高速船は今年の5月24日に就航したばかりの新しい船です。アイヴィントのAは安芸国(広島・呉の旧国名)、イは伊予国(松山の旧国名)を表し、この2つの土地を結ぶ風(ドイツ語でヴィント)という意味があるそうです。松山から広島までの約90分の船旅、揺れも少なく快適だったのですが、やはり天気が良かったらもっと景色を楽しめただろうと思いました。



リニアジェット AIVINT

船の前方にはモニターがあり、走行している場所が分かるようになっています。途中、音戸の瀬戸という幅わずか90mの日本一狭い海峡を通りました。写真は撮れなかったのですが、この海峡には宮島の朱塗りの鳥居をモチーフにした鮮やかなアーチ橋（音戸大橋と第二音戸大橋）がかかっています。また、難工事だった音戸の瀬戸の開削工事を1日で終わらせるために、平清盛が西に沈む夕日を扇で招き返したという「日招き伝説」が残っているそうです。



拡大



リニアジェットAIVINTの航路。位置情報の精度を「低」に設定しているため、上陸していますが、本当は幅90mの音戸の瀬戸を通っていきます。

タイトル横のお刺身は、瀬戸内産の鯛、オニオコゼ、タコなどです！



海の絵本



先月号のカスタネット通信では、『映画ドラえもん 新・のび太の海底鬼岩城』を取り上げました。そこで福音館書店の「たくさんのふしぎ」から、海をテーマにした絵本を3冊ご紹介したいと思います。

鬼岩城の舞台は海底1万mとのことですが、まずはもう少し浅い海底のはなしから。



1冊目は「**沈没船はタイムカプセル**」です。表紙に潜水している人の絵が描かれていることから、沈没船があるのは深海ではないのだろうなと思い調べたところ、この本に登場する沈没船の多くは海底30～50mあたりに沈んでいたようです。約750年前に沈没した元寇の船、約300年前に沈没した黒ひげの海賊船など、さまざまな年代の船が世界中の海に沈んでいるそうです。海底で砂や泥に埋もれると酸素から遮断されるため、沈んだ積み荷などが真空パックされたままの状態で見つかり、当時の技術水準や交易の様子などを知ることができると書かれていました。「水中考古学」という学問だそうです。過去の出来事を伝える、まさにタイムカプセルですね。



2冊目は以前にも紹介したことがある、「**釣って 食べて 調べる 深海魚**」です。なんと日本は、岸から数十分ほど船を走らせれば深海（海面下200m以深の海域）にたどり着ける、世界で一番「深海に近い国」だそうです。ちなみに相模湾もその1つです。「カラスガレイやキンメダイなど体が黒や赤い深海魚が多いのは、深海の闇に溶け込みやすいから」「ノドグロのお腹の内側が黒いのは、エサとして食べたホタルイカやサクラエビなどが放つ光が外に漏れて、自分が大きい魚に食べられないようにするため」など、深海での生活に適応するための深海魚の進化について書かれています。

また、タイトルの通り深海魚を食べていきます。深海魚は沈まずに泳ぐために水より軽い脂をたくさん筋肉に蓄えているので、脂がのっておいしいものが多いということでした。



最後は「**超深海への旅**」です。超深海とは水深6000m以深の海域ということで、だんだん鬼岩城に近づいてきました。文を書かれている蒲生俊敬先生は海洋学者で、深海潜水船に15回も乗船しているそうです。この本では海洋学者のラメール博士と2人の小学生が超深海潜水船「ハデス12000」に乗り込み、日本海溝やマリアナ海溝の探検をします。実はこの物語の舞台は203X年7月で、近未来のおはなしでした。日本にある有人潜水調査船「しんかい6500」が潜航できるのは水深6500mであり、1万mクラスの海溝の底の状況はまだほとんど分かっていないとのことでした。2030年代まではあと数年。この本のようにマリアナ海溝の底まで潜航できる有人潜水調査船が登場するのでしょうか。

海底&深海をテーマとした絵本を3冊ご紹介しました。図らずも、過去・現在・未来のはなしでもありました。絵本ではありますが、おとなでも読み応えのある本です。暑い夏に海の本、おすすめです。